

会員の死を悼む

龍谷大学名誉教授永田啓恭先生が、2005年（平成17年）7月19日に亡くなりました。享年80歳でした。先生は、本学会の前身であるアメリカ経済史研究会の創設（1957年）に参加された11名のうちのお1人で、以来、研究会の時代から今日に至るまで、本学会の発展に多大な貢献をされた方です。特に、研究会の時代、会の存続が危ぶまれるほど活動が不活発になった時期に、毎回欠かさず大会や例会に出席され、私たち若輩を励まし、ご指導くださいました。永田先生と、この時期に先生とご一緒に毎回欠かさずに出席された青山学院大学名誉教授の田島恵児先生がおられなければ、本学会は今日のように存続できていたか否か、誠に危ういかぎりです。会員数は、1973年6月に36名、2006年9月1日現在では87名に増加しましたが、これも先生のご尽力に負うところ極めて大であります。

先生は、殖民地時代から1880年代までのアメリカ鉄鋼業を中心に研究され、たくさんの業績を残されました。『アメリカ鉄鋼業発達史序説』（日本評論社、1979年）はその代表作と思われます。私は専門外ですが、特に関心をもった点について触れておきます。ニューイングランドの綿工業を出発点とした産業革命は、イギリスのように鉄工業に連鎖的に反応したかどうかについての論争です。楠井敏朗氏は、マサチューセッツの鉄工業は原料鉄を外国から購入し、製品の販路もニューイングランドかせいぜいニューヨーク州であった、他方ペンシルベニアの鉄工業は原料鉄をほとんどピッツバーグに送り、そこで加工された製品は、同州内あるいは西部の農業州で販売された、したがって両者の間に素材補填関係はなく、両者は全く独自に別個の発達をとげていたと主張しています（楠井敏朗『アメリカ資本主義と産業革命』、弘文堂、1970年、213～14頁）。これに対して先生は、素材面での関連がなかったことは十分に認めながらも、アメリカ全体で見た場合、綿工業と鉄工業の間に技術的連関の連鎖反応的発展が見られなかったという主張（楠井、前掲書、286頁）には反論します。先生は、部品互換、大量生産方式による兵器とミシンの量産は、ニューイングランドの綿工業機械の発展に触発されて発達したものであり、これは綿工業と鉄工業の技術の連続性の表明である、また、マサチューセッツを中心とした技師や鍛冶工の技術は、ペンシルベニアのみならず、各州に伝えられたとして、技術的の連続性や技術的連関の連鎖反応的発展を主張しております（永田、前掲書、262～3、272頁）。かつて先生にこの点をお聞きしたところ、あの論争は鮮明に覚えている、と言われました。

本学会に対する、先生のご尽力、ご貢献に対し、心から感謝申し上げ、ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

なお、「会員の死を悼む」を『アメリカ経済史研究』に掲載するのは今回が初めてです。本学会もようやく軌道に乗りつつあり、このような掲載が可能になりました。前身の研究会創設で中心的役割を果たされた鈴木圭介先生、黒人史研究の第一人者でいらしゃった本田創造先生をはじめ、多くの会員がお亡くなりになりました。これらの方々にも、本学会に対するご貢献に深く感謝し、ご冥福を心からお祈り申し上げる次第です。

（代表理事：土屋慶之助）